

2015 国際シンポジウム『出生前診断とその国際動向 2～脅威 (threat) からチャンス (Chance) へ』

<企画趣旨>

母体の血液検査だけでダウン症など 3 種類の先天性疾患が分かる新型の出生前診断が 2013 年 4 月にスタートした。しかしこの新型出生前診断をめぐるのは、安易な診断が「選択的堕胎」、つまりは命の選別につながるとして大きな議論を巻き起こし、結局は限られた施設での条件付臨床研究としてのみ実施されている。さらには新型以外のあらゆる出生前診断の正しい理解さえ得られていないのが現状。

しかし、世界の医療技術や遺伝子解析などは日々目覚ましい進歩を遂げている。出生前診断のみならず胎児治療の技術も確立してきた。その技術の進歩と人間がどのように向き合うのか、日本での真摯な議論が非常に重要な局面を迎えている。本シンポジウムでは、そうした世界の最先端の出生前診断やその診断を利用した治療の可能性も紹介しつつ、全体としてシームレスな胎児ケアの可能性を見ていきたい。

来日講演をするのは新型出生前診断の世界的権威であるアメリカタフツ大学の Diana W. Bianchi 教授、胎児治療領域における最先端技術の研究の第一人者マウント・サイナイ医科大学の Mark Evans 教授、国際出生前診断会議の副会長である Haword Cuckle 博士の 3 人、国内からは大阪で日本初の出生前診断専門のクリニックを立ち上げた夫律子院長が参加。最新の医療情報や将来展望、世界各国における出生前診断や胎児治療の現状を紹介する。

特に今回は、Bianchi 教授がすすめるダウン症候群の胎児診断と早期の治療の可能性について、出生前に中枢神経系の発達改善の可能性があるとという衝撃的なレポートも報告が予定されている。本来、診断とそれにもとづく治療が十全に機能することが理想的な医療の姿。その意味で「出生前診断は脅威からチャンスへと変貌する」という Bianchi 教授の言葉をシンポジウムの副題とした。

今回は医療従事者や研究者だけに向けたシンポジウムではなく、ごく一般の社会の方々やメディアの方の参加を想定し、可能な限り医学専門用語は避けて、正確・最新であると同時に平易な講演となるよう心がけ、そのために専門家の立場からのサマリースピーチも用意している。

ともすると出生前診断は正しいか正しくないか、どちらかを選択すべきであるかのような単純な善悪論や迷路のような倫理論争に終始している日本の現状の中で、本シンポジウムが、専門家のみならず妊娠・出産を控えている女性や家族、あるいは障害児を育てている家庭なども巻き込んだしっかりとした議論のきっかけになることを期待したい。